＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

■本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.123 2010 2月号

大月人物伝　ニューギニア戦線生き残り兵の証言　藤本　忠夫

昭和二十年八月十五日、太平洋戦争は天皇の降伏宣言（終戦の詔勅）にて集結した。この天皇の終戦の詔勅は、当時、天皇の玉音として、全国民に放送された。初めて耳にする天皇の声は、雑音が多く、その真意が理解され難いものであったがポツダム宣言を受諾し、連合国に降伏し、戦争が終わった事だけは知る事が出来た。しかし外地に在って闘っている兵士に、その玉音が伝わろうはずはなく、日本から遠く八千キロに存在するニューギニアの兵の耳に達することなど想像も出来ない。昭和十七年を境にして拡大された南方戦線は、米軍に制空制海権を獲られ、糧秣弾薬も無く、精神的戦いをしていた日本軍は、圧倒的物量による攻撃を受け、殆どの兵は、飢餓と、熱帯特有の疾病、空爆、艦砲射撃の餌食となって、尊い命を失い、骸となって、今尚多くがこの地に眠っている。そんな悲惨な戦線の中を奇しくも生存し、帰国された兵が大月市にいた。その人は、大月・上野原・都留市を統括するＪＡクレインの前会長藤本忠夫氏である。

以下　藤本忠夫氏の現体験を聞き、手記にまとめ、ニューギニア戦線の過酷な戦いの全貌を紹介する。

忠夫は、大正十二年十一月三十日、初狩村下初狩三三七六番地（現大月市初狩町通称源氏部落）で出生した。昭和五年四月初狩村立初狩尋常高等小学校に入学、昭和十三年三月同校高等科を卒業、同年四月、初狩村立青年学校本科に入学した、前年の昭和十二年中国にて盧溝橋事件が勃発、戦火は拡大の一途をたどり、日本国中戦争への道に突き進んで行った。忠夫は当時の若者として「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」の精神にてお国のため一身を捧げる意気に燃える軍国青年であった。

青年学校は、軍事教練がカリキュラムで、何時でも戦争に参画できる若者の練成道場で、成績が抜群であったため、研究科に進学を奨められていた。

昭和十六年十二月、遂に太平洋戦争に突入、忠夫の周囲は戦時色が色濃くなり多くの若者が戦線に招集された。

昭和十九年一月二十九日忠夫は、待ちに待っていた補充兵招集礼状が届き、青年学校を中退して、二月一日、世田ヶ谷の東部一〇部隊に衛生兵として入隊した。二月二十九日、東京第二陸軍病院大蔵分院にて衛生兵の教育を受ける。忠夫はこの時、衛生兵となった事がその後の忠夫の運命に多大な影響を与えることとは知る由も無かった。

四月六日、昭和十九年軍令陸甲第三七五により、近衛騎兵連隊と改称、群馬県新鹿沢（浅間山麓）にて、南方行き部隊編成があり、四月二十五日、新鹿沢屯営を出発、東京駅にて下車、翌二十六日宮城遥拝して、皇軍の誓いを新たにし、軍用列車にて東海道線にて西下、豊橋駅にて各地からの隊と大集合し、一路西に、関門トンネルを経て、門司港に到着、門司港にて商船を改造した輸送船（三千トン級第二眞盛丸）に乗船、三十隻の大船団にて、四月二十九日一路南下した。　忠夫は山梨の生まれで海を知らない。海を見たのは初狩小学校の時、江ノ島鎌倉に修学旅行に行ったのが初めてで、二十歳二ヶ月で見た海は「広いなー」との想いと同時に言い知れぬ怖さを感じた。三十隻の船団は、三列縦隊にて航行するも、常に敵潜水艦の魚雷攻撃を警戒する物々しい雰囲気と恐怖の航行であった。最初台湾の高雄に入港する。その時、吾が輸送船の一隻が敵の魚雷攻撃を受け沈没。一瞬自分も海の藻屑と消えるかと想うと大変怖かった。それからは、海は怖いとの恐怖に襲われながらの航行を続け、日夜対潜訓練をするが、敵潜水艦に狙われながらの航行であった。五月六日、フィリピン島のマニラ港に入港、また二隻が魚雷攻撃を受ける。門司港を出港して十日目のことであった。

マニラ港よりセレベス海に出て、東北東に向きを替え、ジェロ島のワシレに無事辿り着いた。

ワシレは、平坦の地で、糧秣を補給してガレラに向かい、上陸して飛行場の建設に従事した。比島マニラを出港してワシレに着く間、輸送船は七隻が沈没、二十五日要しても目的地への上陸はかなわなかった。ガレラにて昭福丸（五〇〇屯）に、吾が部隊二〇〇名位と設立隊だったので車輌其の他を乗せ、六月十二日ガレラを出港、一路ニューギニア、ソロンに向け出港した。六月十五日赤道を越え、二日後ソロンに上陸、翌十六日敵機の空襲を受け、我々の乗船して来た昭福丸はソロン湾で沈没し海の藻屑と消えた。

■上陸後の戦線と帰国

十九年六月、忠夫は潜水艦の攻撃に脅えながらの航路を無事終え、ニューギニアの土を踏むことが出来安堵の胸をなでおろした。

この航路中でも多くの戦友達が海の藻屑となり代え難い尊い命を、国家のためとは云え、亡くしてしまったことを想い悲しさとやりきれない想いで涙さえ出なかった。そしてわが身が何時同じ運命になるかと思うと正直耐え難い思いに駆られ、周囲の美しい景観に見とれる余裕なぞ無かった。

上陸後、直ちに飛行場設営の命令で設営の作業が続いた。しかし何時敵機の襲来があるか、艦砲射撃に見舞われるか？戦線恐々たる思いの連続で心休まる時は無かった。忠夫達は周囲のジャングルの中に幕舎を建てそこで生活をした。

既に南方戦線では、米軍に制空・制海権を握られ、本土からの補給は無く、司令部から自活が命じられていて、現地のサツマ芋の苗を植えたり、

（裏面へ続く）

大月人物伝 歴史探訪

ニューギニア戦線生き残り兵の証言

元ＪＡクレイン会長　藤本　忠夫

ジャングルを切り開いて南方の食物を栽培する作業が日課となった。飛行場の設営が終わっても飛来する我が軍の飛行機は無く、全軍自活が作戦行動となり、自然の椰子の実から椰子油を採取しフライパンで炒め物をして食事をした。また椰子の実の果汁は乾いた喉を潤すには最高であった。中でもコプラの果実は最高の贅沢で、戦争でさえなければ「こんなスバラシイ天国は無い」と何どか思った。また野生のタピオカは主食で澱粉の補給に役立った。

自活作戦が始まると兵には、それぞれの技術を持った職人が居て、缶詰の缶でオロシ金を作り、コプラを降ろして塩味で食べたり、缶を開いて叩き出しフライパンを作ったりした。米は近くに糧秣廠があり、米軍の進攻前に陸揚げされていたので全軍に分配されていた。

しかし東部ニューギニア戦線は、米軍の攻撃が熾烈で玉砕する部隊もあり、補給が無く置き去りにされていた。

米軍はサイパン島の攻略後、作戦を転換、ユオウ島・沖縄攻撃に主力を置き、ニューギニアに鉾先を向けることなく、偶に米軍機が偵察に飛来する程度でまともな戦闘は無かった。ただ海岸一帯は米軍の攻撃にさらされる危険もあり我々はジャングルに隠れての作戦行動（自活）の毎日であった。

忠夫が命を永ら得たのは、正に派遣地域が西部ニューギニアであったこと、ウエーキ島、ラバウル、サンゴショウ海戦など、相次ぐ制空・制海権の奪取戦闘が既に終わり、その後に派遣された最後の南方戦線派兵であったからである。

幕舎は、椰子の葉で屋根を葺き、ジャングルから木を切り出して柱を立て、現地人の家にまねて建てた。また蚊帳は日本出発時に用意して持っていった。蚊帳は各人が頭から被る形状のもので、蚊との闘いに悩まされた。マラリア病との熾烈な闘いの明け暮れでもあった。幸い忠夫は衛生兵であったので、野戦病院に配属され、軍医と接する立場なので安心して軍務に精励できた。また、忠夫はソロンの近辺から移動することはなく師団司令部に近く医師が多く居たので安心であった。しかし、東部に派兵された部隊は、山越えで西部に転進して来たので、殆どの兵がマラリア病か飢餓で死んだ。ニューギニア島の中央部は五千米級の山岳で、山越えをして来た部隊の八十％がマラリア・赤痢・疲労で衰弱した兵は、米食を食べると直ぐ死んだ。マラリアの兵には、特効薬キニーネが沢山用意されていて治療が出来たが、弱っていた兵は助かることなく多くが戦病死している。また戦争とは云え、衰弱死は見殺しにされる恐ろしさを嫌というほど見てきた。

飢餓については、蚊帳の中に鼠が居たとき、将校が「鼠を獲って料理しろ」との命令を受けた。また、ジャングルの中には、猪が沢山生息して居た。猪は狩猟班があり、狩猟して栄養補給と云い大いに食した。食糧には、バナナ、パパイヤ、タピオカ、焼き鳥、猪など栄養価の高い食物にこと欠かず、病気にならずに済んだ。焼き鳥、焼肉をするのは夜で、昼間は煙を出すと米軍機が飛来するので留意して料理した。以上のような自活作戦が我が軍の毎日で、戦闘らしい戦闘は無く終戦まで続いた。　八月十五日の終戦は、司令部は承知していたが、我々兵には知らされず九月になってから発表された。しかし忠夫達兵は、「帰国は出来ないだろう」と話しあった。暫くしてオランダ軍が来て、戦争犯罪者の探索が始まった。そのための獄舎が建てられた。オランダ軍には黒人も居たが、白人は紳士的であった。時計、万年筆は現地人が欲しがり全部置いた来た。現地人は、我々に戦争犯罪人は「これ、これ」と指差し、「前に出ろ」と、一歩前に出され戦争犯罪者にされたので忠夫は身の竦む想いでひやひやしていた。しかし我が部隊からは独りも無く帰国が出来た。戦後処理は、オランダ軍は紳士的でソ連のようなことは無く安堵した。武装解除は、全軍整列して武器を出し、使役で弾丸は海に投棄させられた。オランダ軍は温厚に忠夫達に接してくれた。忠夫の軍隊手帳は本部に取り上げられ、軍人勅諭の部分だけ切り取って返還され帰国後の現在も大切に所持している。また終戦時、兵による反乱的なことはなかったが、帰国船の中では、普段威張り腐っていた、下士官、将校連は、兵の報復を恐れて船底にひそみ甲板に出て海原を観るようなことは日本に着くまでしなかった。忠夫達は甲板に出て海を眺めながら、共に帰国が出来ない戦友を偲び涙を流す日々でもあった。かくして二十一年六月十四日、帰国船は和歌山県田邉港に着いた。田邉港で眼前に広がる岩山と松の木の景色に「故国にやっと帰って来た」と、同時に「美しいなー」との想いを深くした。

忠夫は、顧みてニューギニアも海岸の夕日は実に綺麗で、椰子の葉陰の月を見ると、日本を思い出し涙が止まらず泣けた。また九州と同緯度と言われ、南十字星は、実に美しく上に一つ、両サイドに二つ光輝く様は何とも綺麗で、戦争でなければ天国と思い、「平和で戦争の無い世界が望ましい」と祈った。いま、無事に帰国がかない一番思うことは何かを問うと、忠夫はこう答えた。

「人間の最後は、ある人は、沢に埋もれ、ある人は、白骨になり蛆にまみれ、戦争に拠る人間の究極は憐れに尽きる。戦争だけは絶対にしてはならない」と。　招集兵の多くは三十代で、妻子を祖国に残していた。ソロンに居た兵は帰国できたがソロンから作戦に出た兵は、玉砕戦死している。山梨県内で忠夫と帰国を共にした人に、後に韮崎市長となった内藤　登氏がいる。

執筆者　井上　文次郎